

不登校児童とハローアニマルとのかかわり(事例報告)

長野県動物愛護センター

○ 松沢淑美 和田啓子 中村和夫

1 はじめに

当施設は平成12年4月に開館以来多くの方々に親しまれ、平成13年1月末日現在来館者11万人を越えた。さらに希望する福祉施設、学校、幼稚園、保育園、育児サークル、公民館、児童館等に訪問し、動物とのふれあい及び適正飼養の知識の高揚と普及啓発を行っているところである。

今回、県内の小学校から依頼を受け、いわゆる「不登校」といわれる児童と動物とのふれあい事業を実施した。回を重ねるごとに本人たちに若干変化がみられたのでここに紹介する。

2 対象

県内の小学校に在籍する小学生3名

A 少年:小学4年生 小学2年生より不登校

B 少年:小学5年生 小学4年生より保健室登校

C 少女:小学5年生 小学5年生より不登校

3 経過

第1回目(平成12年12月)

A少年とC少女が教諭と共に参加

犬、猫、ウサギ、モルモットとのふれあい

A少年は犬を怖がり、触ることができなかった、発語なし

第2回目(平成12年12月)

A少年、B少年、C少女が教諭と共に参加

犬、猫、ウサギ、モルモットとのふれあい

A少年は犬を怖がりながらも、散歩体験ができた

第3回目(平成13年1月)

A少年、B少年、C少女が教諭と共に参加

子犬のシャンプー体験、成犬散歩体験

A少年は犬に触り、簡単な指示を出せるようになった

B少年は犬を飼うことを決意し、両親を説得した

第4回目(平成13年1月)

A少年、B少年が教諭と共に参加

ウサギの世話、飼育室清掃

A少年は犬を自分の横につけて歩き、犬の名前を呼び簡単な指示を出すことができた、発語あり

第5回目(平成13年2月)

A少年が教諭と共に参加 熱心に犬とかかわり、発語あり

A少年については、当初発声がなく、犬に触ることができなかったが、回を重ねる度に変化がみられた。当施設職員が小さめのおとなしい犬を選び、簡単な指示に従うようしつけをした上で、A少年に指示の出し方を教えた結果、現在は犬を自分の横につけて歩き、犬の名前を呼ぶことが出来るようになった。

A少年は、家に引きこもって寝ていることが多く、家を出発できるまでに30分以上かかっていたが、2回目からは当日起床して待っていたとのことであった。3回目は来館後学校に行き、お昼の給食をたいらげたと担当教諭が驚いていた。

B少年については、当施設職員所有の犬と出会い、その後当該犬を譲渡してほしいとの申し入れがあったがかなわず、本人が両親を説得して同じ種類の犬を飼う許可を得た。犬を飼い始めたら、しつけ方を学びに当施設を訪れることを楽しみにしている。

C少女については、当初より犬に対しても職員に対しても友好的で積極的に見えたが、4回目以降は参加していない。

4 まとめ

教育現場における不登校は大きな問題となっている。各々の児童によって不登校に至った経緯も現在の家庭環境も一様でなく、ここでの取り組みによりその原因除去が出来るわけではない。しかし今回、児童達が当施設を訪れることにより、動物を介して他者との接点を持ち、動物のぬくもりに触れ、世話をするために体を動かし、犬の目を見て心を通わせようと努力した姿は感動的であった。犬が児童達の働きかけにきちんと応えており、本人達は当施設を訪れることに意欲を示している。

動物には児童が本来持っている能力を無理なく引き出す力があり、まっすぐな動物の反応は児童を素直にさせ、緊張感がほぐれ癒しの効果があると言われている。さらに児童を取り巻く周囲もまた変わることができるという効果があり、本事業の有用性を感じた。

我々獣医師は決して心理学の専門家ではないが、日頃から言葉の通じない動物達を相手に奮闘している経験を生かし、現代社会に動物を介していくらかでも貢献できるのではないかと考えている。

今後教育現場と連携を図り、こういった試みを充実させたいと願うところである。